

ぱびるす

聖学院大学総合図書館報

第52号 (2011年春)

祝卒業・
新生歓迎号



想像力を養う図書館

平 修久

想像力は、人間だけに与えられた能力の一つだ。その想像力を養ってくれるのが本だ。

まずは、内容が想像しやすい本の紹介。サッカーが好きな人にとっては、無名の高校生リュウジが単身スペインに渡り、プロチームで活躍する野沢尚の『龍時』は、個々のプレーの描写が興奮を誘う。3巻まで発行されたが、作者の急逝により未完のままで終わっている。その後のリュウジの活躍は各読者の想像に任されている。小学生がFCバルセロナの選手とフットサルをする奇想天外な『銀河のワールドカップ』（川端裕人）という小説もある。実名のブラジル人選手が小学生相手に「あつく」なるシーンでは思わず笑ってしまう。

ファンタジー的な話の展開がイメージを膨らませてくれる小説もある。飯田譲治の『アナン』では、ホームレスの男とその男に拾われた少年の周囲で不可思議な現象が次々と起こり、人々の心が癒されていく。少年の優しいまなざしが思い浮かび、読んでいて自分の心も温かくなっていく。

一方、クライシス・ノベルという小説のジャンルがある。地震や噴火などがどのような被害を及ぼすかをシミュレーションした小説だ。

例えば、石黒耀の『死都日本』は、今年の1月下旬から噴火した新燃岳を含む霧島火山帯が大噴火した場合の小説だ。火山学者から学んだ詳細な知識をもとにした描写が続くので、火砕流など火山噴火の恐ろしさが文字から浮かび上がってくる。

石黒は、東海地震を題材にした『震災列島』や富士山噴火を描いた『昼は雲の柱』といった作品も書いている。

阪神・淡路大震災を経験した高嶋哲夫は、震災の大変さを伝えるため、『M8』という東京直下

型地震をテーマにした小説を執筆した。また、地震に伴って発生する津波を扱った『TSUNAMI』の執筆途中に、インド洋大津波（2004年）が発生したという。さらには、2つの大型台風が合体して東京を襲う『ジェミニの方舟』（文庫本のタイトルは『東京大洪水』）という本も出している。これらの小説では使命感に燃え自己犠牲を省みないヒーローが登場し、被害を最小限に食い止めてくれる。読み終わるとホッとするものの、最悪の事態を想定した防災の必要性を痛感させられる。

想像力は、相手がどのように思っているかの判断にも役立ち、良好な人間関係を保つ上で大切であるとともに、楽しく豊かな生活を送る上でも欠かせない。テレビなどの画像は情報量が多く、そのまま内容が分かる。本は文字だけで情報量が少ないので、想像力で補わざるを得ない。それだからこそ、本を読むと想像力が鍛えられる。想像力は一種の考える力でもあり、頭を柔らかくすることに役立つ。大学での様々な学びの基礎になる考える力が本を読むことにより養われる。

私たちの想像力を養い、かきたててくれる本が、手にとって読んでもらうことを待っている。そうだ、図書館に行こう。

(コミュニティ政策学科 教授)

リクエストをしよう!

～読みたい本、あきらめないで!～

図書館の本は先生方が選ぶだけではありません。あなたも希望することができます。本屋さんにはいい本があったけど、買うのはちょっと…と思っている方、どうぞリクエストしてください。

OPAC プライベートページから、またはカウンターでも受付けています。

